



昭和2年7月7日創立

世田谷区立東大原小学校

同窓会報

平成22年度 第2号
(平成23年3月発行)

発行所
世田谷区大原1-4-6
東大原小学校同窓会

発行人
宮川英子

確実な歩みを続ける同窓会

会長 宮川英子 (十三回生)

昨年の夏は例年にならない酷暑でした。その夏の暑さが過ぎて、日本のさわやかな秋を味わういとまも無く、厳しい寒さの冬が訪れました。

日本の四季はどこへ行ってしまったのでしょうか。

また、新聞テレビなどの報道は、毎日のように子供のいじめ、虐待を報じています。親が子を、子が親をあやめる事件が跡を絶たない、

心豊かな日本の社会は、どこへ行ってしまったのでしょうか。

同窓会の会員は、こんな現状であるからこそ、力を併せて、それぞれの立場で、こころ豊かな社会を築いていきたいと願っています。

同窓会の目的の一つは、会員同士の親睦です。私たちは、卒業以来、音信の絶えていた方々を一人でも多く探し出し、仲間として迎えたいと考え、ささやかながら交流の輪を広げることができました。

更に、母校の発展と、在校児童の健やかな成長に役立つことも目標としています。学校、地域の活動にも、いろいろ協力してきました。

会員名簿の充実に力を尽くし、電子化を推進しています。各期クラス会、同期会の幹事の方のご協力による連絡に感謝いたしております。

また、年会費(千円)の納入にも協力していただき、さらにご芳志も数多くの方から賜り、年間計画を上回る会計状況となっています。

次年度は母校創立八十四周年です。母校のこの輝かしい歴史を讃え、同窓生の誇りとして、同窓会活動を推進していきましょう。

今年度の主な活動

定例総会開催(四月)学童疎開先訪問(五月)母校運動会への参加(五月)安全パトロール運動開始(五月)母校「道徳教育公開講座」に会長が講師参加(六月)会報一号発行(七月)下北沢阿波踊りへの参加(八月)代田八幡三土代会夕涼み会参加(八月)校庭キャンプへの参加(九月)鴨川親睦旅行開催(十月)親睦ゴルフ開催(十一月)学芸会参加(十一月)太鼓ライブイン東大原への参加(十一月)学校関係餅つき大会参加(十二月)



平成二十三年定例総会のお知らせ

左記の要領で平成二十三年定期総会を開催いたします。同窓会会員には出席のほどお願いいたします。

またまだ会員になっておられない同窓生もお誘いあわせご来場のうえ会員になっていただきたくお願いいたします。

日時：平成二十三年四月十七日(日曜日)
三時から五時

場所：東大原小学校体育館

内容：総会議事、講演会、懇親会

講演会は五十八回生の筧伸浩さん

演題：望遠鏡で宇宙を旅する

少年時代の天文への夢を実現し、北海道天文台で天文学者として活躍する現在までの先輩の話を、中学一年になったばかりの新入会員と共に楽しみたいと思います。

「竹の子」クラスの教え子たちと

旧教諭 伊東主恵

今から四十数年前、新卒三年目の若く未熟な私が五年生の担任をすることになり、自分をほうり込むように夢中で過ごした二年間でした。

手作りの文集「竹の子」を作ったことから「竹の子」クラスと呼ぶようになりました。

当時、町田の私の家に連れだつて遊びに来たり小学校を卒業して何年か後も、私が結婚して信州の山奥の分校に住んでいた所へも何人かが訪れて来たりなど、交流が続いておりました。

この「竹の子」の仲間が二年前の六月、私の喜寿を祝つて信州大町に住む私の所へはるばる集まつて来てくれたのです。

東京勢を中心に遠くは九州福岡や石川県小松市から十三名などで、卒業以来久しぶりに会う人もいました。集まつた顔にこどもの頃の姿が重なり、言葉にならない嬉しさでした。

一泊の交流の中では、親の介護をする人、自身の病気を克服して笑顔を見せる人、仕事で世界を飛び回っている人、奥さんを難病で亡くして「残された者はたまらないよ」と淋しい顔をみせる人、泊まつた宿が偶然先年亡くされた夫君と北ア縦走のあと泊まつた温泉宿だったという人、それぞれの日常を語り合いながら、気持ちには過ぎし日を越えて東大原の教室にいるようでした。

翌日は、東電のバスで高瀬溪谷の二つのロック

フォルダムを見学し、檜の穂先を眺めたり、一面に広がる菜の花畑の丘陵を歩いて信州そばを味わったり。

小学校卒業後も「竹の子」クラスのまとまりの良さは、何よりも丁寧に連絡をとり、集まりの後は、写真入りで、ニュースを届けてくれる重松君の力が大きいのです。

つい先日にも、当時の教師仲間が集う「大原会」を機に、重松君の呼びかけで「竹の子」の仲間が下北沢に集まりました。

誠に教師冥利に尽きる思いです。

同窓会の力持ち

副校長 大橋園子

大きく振りあげられる杵、「よいしょ、よいしょ」の掛け声とともに一年生とくるみ学級の餅つきが盛り上がります。今年も、同窓会から野地さん、神谷さん、関根さん、梶川さんが助人として来てくださいました。毎年暮れになると、くるみ学級と一年生が餅つきをします。この学習

のねらいは、①一年生とくるみ学級の交流②冬の伝統的行事を楽しむ③というものです。「同窓会の人とは、小学生の時に東大原で勉強して卒業した人です。」という説明



に、なんだかけげんな顔の子どもたち。それでも同窓会の方々の力強い姿に目を見張っていました。さあ、次は自分たちの番、子ども用の杵を見様見真似で振り上げ、全員が餅つきをすることができました。同窓会の方々のおかげで三臼をつくことができました。つきたてのお餅は保護者の方に丸めてもらいきなこ餅にして食べました。同窓会の方と子どもたちの交流の場として、今後とも参加のほどよろしくお願いいたします。

(昨年十二月一日に行われました。)

こころにひびけ！

太鼓ライブイン東大原

益井純子(三三回生)

同窓会の協賛を得て十一月七日(日)東大原小体育館で太鼓ライブを開催しました。たまつ子座の太鼓はとても迫力があり、子供から大人まで心ゆくまで太鼓に酔いしれました。総勢十一人。演奏のみならず「体験コーナー」

もあり、ご近所のある人この人が思いがけないパフォーマンスを披露してくれました。世田谷区の「地域の絆再生支援事業」の指定も受け、町会、商店街、こども劇場せたがやなどで実行委員会を組みスタートしました。創



造団体との打ち合わせ、参加券の販売、当日進行と役割分担、やることは山ほどありました。今回同窓会理事として実行委員に加わり、学んだことがあります。それは地域への信頼と人々への愛情が基本的にとっても大切なことだということです。商店街の方々、同窓会の方々には親身のお世話を頂きました。

その結果当日は二〇二人の参加があり、三一枚のアンケートが寄せられました。「身体にひびいた」「感動した」「昭和と言う時代を感じた」「東大原小の卒業生は帰って来る楽しみが出来るのでまた企画して下さい」というものがありました。アンケートから今までの苦労が報われたと思いました。たくさん感動を本当にありがとうございました。

私達の同期会

篠山茂行(十一回生)

私は昭和二年(一九二七年)から現在地の北沢四丁目に住んでおります。当時は小田急線が開通した直後で宅地造成が始まったばかりでしたから、近辺は雑木林や畑が広がり、小川が流れ、池がある風景でした。小学校に入学した翌年の昭和八年(一九三三年)に井の頭線(当時は帝都線)が開通しましたが、その頃は下北沢駅西口から成徳高校までの道路西側一帯は松や杉の太木で覆われていました。私たちはここで、かくれんぼをしたり、夏にはトンボ、セミ、カブトムシなどを採っていました。なつかしい思い出の場所です。

小学校の卒業は昭和十三年(一九三八年)

三月、私たち尋常科卒業の六年生は男子が三組、女子が三組あつて、どの組も五十名以上の人数でした。

昭和十二年(一九三七年)に支那事変(日中戦争)が勃発し、昭和十六年(一九四一年)に太平洋戦争(日米戦争)へと突入しました。この頃は中学校の高学年の時で、学校では授業に「教練」という課目があつて、重い銃を持つて軍隊式の酷しい訓練を思い出します。時には千葉県習志野の広野で、また富士山の麓の駒門廠舎、板妻廠舎など軍隊兵舎に泊まり掛けで行き昼夜を問わず実戦的演習でシゴかれたものでした。

太平洋戦争が次第に激しくなり、私たち学校の授業は中止されて男子も女子も学徒動員で軍需工場へ行って兵器作りをしました。昭和二十年(一九四五年)三月十日の東京大空襲について、五月二五日にB29爆撃機の大編隊からの焼夷弾投下で世田谷、渋谷、新宿、中野、杉並の一帯が焼け野原と化し、小学校の校舎も消失しました。そして広島、長崎に原子爆弾が投下されて敗戦が決定的となり八月に敗戦でした。戦時中の暗い悲惨な苦しみからやつと解放され平和になって学校の授業も再開されました。



さて私たちは社会人になって、昭和四七年(一九七二年)に小学校時代の有志が集まって三栄会と称した同期会が発足しました。この三栄会の名付けは卒業時の第三荏原尋常小学校、昭和一三年三月卒業、男子三組女子三組の三三〇名が卒業の三の数字に因んでいます。

平成に変わりました後、世田谷を中心に住む同期生の親睦会を持つようになり、下北会と名付けて発足しました。会員数は十数名、男性女性ほぼ同数で、年に一度、秋の季節に下北沢、新宿などに集まってひとときを楽しみく過ごしてきました。この下北会も会員の高齢化とともに他界された方もあつて出席者が次第に少なくなり、一〇数年続いた同期会は一昨年が最後となりました。

大正、昭和、平成の時代に生き、八十路を半ば過ぎ、戦前、戦中、戦後を体験してきた私たちですが、今は只々戦争を起こさない穏やかな日々が続くことを願うばかりです。

仕事とは

山崎康久(十四回生)

この文章は、後輩の中学生、高校生を対象に書いたものです。私の五十年以上にわたる仕事人生の原点と言うべき経験をお話し致します。

学校を卒業し凸版印刷に入社しました。最初に現場に配属され二年目に営業と現場との間にあつて品質管理と納期管理をする作業部という重要なセクションに配属されました。

ある日、課長から「山崎ちよつと来い」と呼ばれ課長席まで出かけました。

この課長は、常に数百点の製品が今どこでどんな状態に在るかをそらんじている大変仕事が出来、また、人格的にも尊敬の出来る方でした。

現場でミスをし、それが営業からの連絡が無かったための事故であることがわかり、私と現場の責任者との間で「言った」「言わない」の水掛け論になりました。

その時、課長から「そんな大事なことを何故紙に書いて渡さなかったのか」ときつく叱られました。

それから間もなく、同じような事故が起きました。

再び課長から呼ばれました。こんどは意気揚々と課長の前に出かけ「紙に書いて渡しました」と大いばりで告げました。

すると課長は、「こんな大事なことを何故紙に書いたものだけですまし、口頭でも伝えなかつたか」ときつく叱られました。

口頭では駄目だから紙に書けと言われ、紙に書いて渡したら何故、口頭でも話さなかつたのか叱られて、憤然として腹の中でこの課長は無茶な人だと決めつけていました。

私がこの課長が言わんとしたこと気が付いたのはそれから数年も経つてからでした。

仕事をするうえで最も大事なことは相手に対する思いやりだ。思いやりがあれば紙に書いたものを渡すだけでなく、念のため口頭でも伝えたことと思う。この気持ちさえあれば

大抵の仕事はうまくいくはずだ。

思いやりは仕事のうえだけでなく人と人の付き合いで最も大事なことでないでしょうか。

社会人としてのスタート時期に良い上司に恵まれ幸せでした。

東大原小・自動車事故第一号

磯 正 格（十五回生）

小学校三年の二学期、昭和一三年九月一日のことだった。家の近くの水道道路（現・井の頭通り）の交番の前で、軍用資材運搬中の小型トラックの後方からぶつけられ、ハネとばされて瀕死の大怪我をした。気がつくと、立ち番中眼前の事故でビククリしたお巡りさんの顔があり「まだ生きてるぞ」の声が耳に入った。不思議なことに痛みはまったくない。動こうとしたがダメ。右足首がブラブラになって反対を向き、白いものが見えている。そのうち又、意識が無くなつてしまった。

当時の水道道路は軍用車が三日に一台位通るだけ、普段は牛車や馬車がのんびり通っていただけに、学校でも自動車事故は第一号で、新聞にも出ていたらしい。

その日は北沢八幡神社のお祭りの日だった。

当時の第三荏原尋常小学校（現在の東大原小学校）は、北沢地区と大原地区の子供が一緒で、北沢八幡のお祭りの日は北沢の子供はお休み、大原の子供は氏神様が大原稻荷神社なので、半ドン嬉しい日だった。お祭りの日も曜日ではなく日にちで決まっていた。午前中

の授業が終わり、大急ぎで帰宅、カバンを玄関に放り込んで、近くの池にトンボを採りに行くため（勉強などは二の次）、鳥もちを駄菓子屋に買いにいこうと水道道路の左端を駆けていたの事故だった。

その頃救急車は無い。轢いたトラックの荷台に巡查が介添えをして病院に行ったが処置不能と断られ、三軒目の、名医だが東京大学病院勤務のため滅多に居ない先生の病院に担ぎ込まれた。幸い名医在院中で診てもらえたらしい。何やら騒がしいので目が覚めた。名医は右足を膝下から切断すれば助かるかも知れない（当時はペニリンなど抗菌薬はない）と云っている。駆けつけた父親は切らないで助けてくれと懇願している。そのうち又意識が無くなつてしまった。翌朝になり意識が戻った。

緑の大草原を明るく方角に向かって歩いていたら「オーイ」と呼ぶ声が後方からした。何事だろうと戻ろうとしたら、「目を開いた。目を開けた」と母親の声がした。あの世に行かず、この世に戻つたらしい。右足はと思ひ動かそうとしたら激痛が走った。足は切断しなかつたらしい。真夏の路上の事故で、頭部、胸部を強打して居て足は複雑骨折をヤツと継いだという状態。「日本男児だ。お国のために役に立たねば、負けてたまるか」と子供心に思ったが、それも当時の愛国教育の賜物かもしれない。

それから二年間は松葉杖生活となった。水泳をやれとの名医の指導で平泳ぎを毎日やったら杖なしで歩けるようになった。それに頭を強打したので、脳内の回路が少し変わった

のか唱歌だけは直ぐに覚えるようになってしまった。

六年生の時、音楽の栗林展子先生に呼ばれた。世田谷区の唱歌コンクールがあるので、独唱で「いてふー銀杏」を歌うようにご指示があり早速練習した。会場の駒沢小学校で大きな声で一生涯懸命に歌ったら、予想外の優勝だったが、最後の東京大会は戦争激化のため中止となつてしまった。残念だったが、しかしその後数々の場面で、歌ダケは直ぐに覚えらる特技が役に立って難局を切り抜けられたことが何度もあつた。

人間万事塞翁が馬、この世に舞い戻つてから「自分の信ずる、正しいことを、キチンと行う」。それに反する者には、負けてたまるかと思う思いが非常に強くなり、筋金入りの強情張りになつたような気がする。

疎開をくぐりぬけて

若い同窓生へ

田嶋照郎（二十回生）

同窓会報への寄稿となれば、やはり当時の思い出話となる。そして私にとってはそれは「学童疎開」なのである。

昭和十六年十二月八日、この国は戦争を始めた。私が小学校一年の冬である。それから三年、華々しい戦果を報じながら、やがて負け戦の状況に陥り、ついに十九年八月、私が小学校四年の夏、校庭に集められた児童一隊が長野県松本市郊外の浅間温泉に、そして近郊に爆弾が落ち、翌年四月には更に天竜川沿いの村々に再移動した、いわゆる「学童疎開」

である。

「集団疎開」の意義は「防空の足手まといを除くことで防空態勢を強化する」一方「若き生命を空爆の惨禍より護り次代の戦力を培養する」と格調高い。（逸見勝亮著「学童集団疎開史」大月書店より）

両親や家族から離され、空腹を強いられ、蚤や虱に悩まされ、辛く淋しい体験は、その後ずうーと私の心に残つた。

しかし老年を迎えた頃から、「疎開」のお蔭で、恐ろしい空襲に直面せず、戦火に逃げ惑う体験をしなくて済んだという見方もあると考えるようになった。

戦争は二度と体験したくないが、世界各地の紛争の報と、子供達の犠牲の惨禍を知るとき、ふと「疎開」の有難さがよぎることがある。おまけに近年は糖尿病を患い、食事制限の指導を受ける身になつたが、不思議に空腹は気にならない。これも「疎開」の経験が役立っているのだろうと感謝の気持ちになっているから不思議である。

もし今、いじめや進学や就職で苦しんでいる若い同窓生がいたら今の苦しみ辛さはそう永くは続きません。

消極的な進言ですが、時は必ず解決してくれます。嘘だと思つたら最後まで生きてみて下さい。私も最後までみきわめるつもりでいます。

一世一代の目を開けて罪を被る

桑原翠（二一回生）

それは私が小学四年生で、戦争が終つた

一九四五年の秋頃、場所は長野県飯田市の近郊の鶏足院と云うお寺、石段を登り山門をくぐると広い境内があり本堂の入り口の柱には「東京都東大原国民学校学寮」の表札が掛かつていた。三年生から六年生の三十数名が集団生活をしてた疎開先での話です。

大多数の同窓会の若い人達は集団学童疎開と云うものがあつた事は大体知つていてと思ひますが、当時世の中の状況はと云うと、戦争の末期本土に空爆が本格化し始めると、村の学校は兵舎として徴用され閉鎖、やむなく寺小屋的教育環境が二、三ヶ月続きましたが、戦争が終わると村の学校が使えるようになり、再び地元の子供達と同じ教室で勉強出来るようになりました。登校する時は集団ですが、下校はばらばらに帰ることになっていました。

そんなある日、就寝直前に全員本堂の本尊に向かつてきちつと正座して並ぶように指示され、何のことかと神妙に待っていると、小松先生が立ち上がり、全員顔を上げ正面を向くように言われ、強い口調で「今日学校で他人の弁当を盗んで下校時に食べた者がいる。全員目をつぶりなさい、そしてそれは私ですと思つたら目を開きなさい」と。暫らく静寂が続くが誰もが困惑している様子、ため息で分かりました。このままだと何時までたつても終わらないと思ひ、私は目を開きました。先生と一瞬目が合い、先生は即座に解散してよいと云われました。

うそも方便と言いますが、私の行動が皆を救つたのだと自画自賛、罪を被（かぶる）の表現

はちよつと大げさかも知れませんが、英雄になつた気分では有頂天になっていました。その頃の日本の風潮は特攻隊員を賛辞し、この戦争は必ず勝つと信じ、お国のためなら死も厭わないと云う思想教育が浸透していたからです。目を瞑っている間、対象人物は粗暴ではあるが



ボスの存在の六年生のI君ではないかと、同じような性癖のあるM君かなと想像したりしていました、ひよつとしたらターゲットは自分かも知れないと思つたり、但し私の目を見て決着したかどうかは定かではありませんが、食べ盛りの年齢で常に空腹と粗食に耐えていたのは皆同じですから。

大人になつて振り返つて見ると、あの盗難事件は本当にあつたものなのか、疑問が沸いてき

ます。何故なら学校では殆どクラスは同じ行動をしているので盗む機会など無いはずでした。率直なところ戦争が終わると、我々疎開児童は地元にとつてはお荷物になつて来ている感じがありました。地元の生徒たちからも態度が現れ、早く帰ればいいのにと虐めが始まつたからです。目を瞑れと云う演出はトラブルを未然に見越した先生自作の警鐘だつたような気がしてならなりません。

真相を知っているのは小松先生と私の記憶では優しい寮母さんたち、(もてぎさん、いばさん)ではないか、また鶏足院で集団生活をした同志はどう感じていたのか。秋のだいぶ深まり雪のちらつく頃、帰京の途につきました。

年四回のイベントを楽しく

続ける二七回生二組有志

大竹英一(二七回生)

私たち昭和二九年卒の六年二組(関口皓二先生)の級友たちは、大変仲が良く以前から年四回のイベントを続けています。三月のお花見、六月のバーベキュー、八月の夏の遠足、十二月の忘年会です。どの会も十五人くらい集まります。今年のお花見は和泉多摩川べりの桜を楽しみました。六月は例年どおり北澤の多君宅の庭でワイワイガヤガヤですが、女性陣は、食材をさばき、男性陣は炭火起こしや会場設営と手慣れている。

八月の夏の遠足は、今年は特別だった。東北新幹線+レンタカーで八幡平、大鰐、弘前、白神山地、鱒ヶ沢、十和田湖、奥入瀬溪流、八

甲田山、八戸を二泊三日で巡つたが、天候に恵まれ、初の遠出を楽しんだ。

十二月の忘年会はこれも恒例で、下北沢の茶沢通りにある「かつ良」に十四人が参加した。遠くは三島の永野君、柏の岡本君もやつて来ました。来年は皆さん古希を迎えますが、とても元氣です。

それから今年の特筆する事がありました。アメリカのアリゾナに住む同級生・河本志郎君が九月に一時帰国して、関口先生、同級生達と五十六年ぶりに再会したことです。河本君は、黒い顔をして、



真っ白な頭になっていました。だが、昔と変わらず元氣で、五分もしないうちに六年二組の生徒に戻っていました。

暗号は「定例会」

足立遼三(二七回生)

私たちは今年古希を迎える二七回生です。卒業時は六年三組竹内はつえ先生でした。

この年代、ようやく仕事からも家族の諸々からも解放され、何かやつてみたい歳なんですね。

一年ほど前からそんな連中が男女五・六人集まつて、飲み、喰い、歌いかつ何でも対等に話をしようというようなことで月に一回集うようになりました。

半年もやつているうちに、お互い、「おとうちゃん」、「おかあちゃん」に対して後ろめたい

気分にもなつてまいりまして、なにか会に理由をつけようということになりました。

話し合いの結果、私が三年ほど前から俳句などをひねくつていた関係で、「五・七・五」を勉強しようということになりました。

それでメールでの打ち合わせに「飲み会」でなく暗号として「定例会」を使うようになったのです。

もちろん中身は飲み会ですが「句会」を名乗る以上、会の初頭十五分くらいは真面目に俳句の話をしております。

そんなことをしているうちに皆さん俳句への興味を持ち始め、この頃では郊外への吟行会も行うようになりました。しかし帰りは間違いなく行きつく先は飲み屋とあいなっております。

皆さん、俳句はいいですよ。

なんとといってもお金がかからない。外に出ることで歩くようになり体に、頭にいい、しかも四季を楽しめる等々良いことづくめです。皆様も是非どうぞ。

昨秋小田急線黒川附近の谷戸の秋を楽しんで

吹くがまま 吹かせて元の 秋桜 遼三

友禅染を生きる 父と私と

萩原いづみ（三三回生）（旧姓山田）

平成一四年、父、山田貢は九〇才にてこの世を去った。一五歳、尋常高等小学校を卒業と同時に友禅染をしている師匠（後に人間国宝）の元に弟子入りした。右も左も判らぬまま、師匠について上京。戦争を経た後昭和

二六年、世田谷の大原にて独立。それから約五〇年をこの地で友禅染一筋に生きぬいた人であった。（社）日本工芸会に所属し展覧会に出品する作品作りに、命を懸けたような人生をおくった人と言つても過言ではないと思う。その努力が認められたのか、昭和五七年世田谷文化功労者、昭和五九年人間国宝に認定された。

この様な父を持った為か、私は小さい頃から美術関係の事は大好きであった。父の仕事を除いては・・・何故なら父を見ていて、私にはここ迄凄まじい仕事は真似できないと思つていたから。色々考え三〇歳になるまでは、全く違う道を歩んでいた私である。三〇歳になった時やりたくなかつた友禅染の仕事を、何故か覚えて見ようかと思う自分に出会つた。そこから私の人生は一八〇度変わった。

着物の寸法から始まり、染料の事、友禅染の技法やデザインの事、覚えることは山ほどあつた。その頃、私は立川に住み、二人の子育てをしながら毎日大原まで通つた。これは二六年間続いた。なかなか思うように覚えられない。父の仕事を手伝いながら手探りで覚えていった。よく一人前になるには一〇年かかるといわれるが、雑用の多い私はそれ以上。亀のようだった。父が元気で長生きしてくれたお陰で父の所属する展覧会にも挑戦し賞を頂くこともできた。少しは恩返しになったのだろうかと考え。今は時々鑑査委員もやらせて頂き、身の引き締まる思いと、自分の作品作りにも一層責任を感じる今日この頃。私の友禅作家

人生も、いつの間にか三〇数年が過ぎたことに驚いている。

「あなたも東大原ですか」から
生まれた小さな同窓会が開かれる

大竹英一（二七回生）

十月二十八日お昼、母校近くの寿司屋に二十回生の河野照秋さん、田嶋照郎さん、十三回生で同窓会長の宮川英子先生そして二十七回生の私、大竹英一が集まりました。この会は、昨秋ある会合で河野さんと私が一緒になつた折り、初対面でありながらお話をしているうちにお互いが東大原



小の卒業生であることが分かり、その奇遇から生まれました。河野さんは現在、大阪の八尾市におられて、北沢を離れて六十年になるといいます。大変、懐かしがられて是非とも同窓生に会いたいという気持ちが強く、今回同級生の田嶋さん、同窓会長の宮川先生、橋渡し役の大竹の四名の「小さな同窓会」となつたわけです。この日は、外は冬のように寒い日でしたが、寿司を囲んだテーブルでは、昔の学校の写真を見ては学校生活の話、学童疎開の浅間温泉のこと、担任の注連沢（しめざわ）先生のこと、空襲で焼けた大原のこと、兄弟六人が皆、東大原小出身であることなど話は尽きませんでした。来年の同窓会には必ず出席しますと言つて、河野さんは、新幹線で大阪に帰りました。

平成22年2月から平成23年1月末までの一年間に会費・寄付を頂いた方々(数字は回生)

2	岸田 義明	13	福島 昭子	18	富田 功	22	張 富士夫	26	上神谷 俊秋	29	福士 木綿子	33	和田 公代
7	中田 大郎	13	石倉 愛子	18	酒匂 芳郎	22	綾部 亘	26	高木 光子	29	藤森 和子	33	和尾 千鶴
8	小泉 秋子	13	土肥 京子	18	土屋 貞幹	22	西岡 巖	26	陰山 英夫	29	河村 郁子	34	西岡 万里子
10	中島 寿子	14	山縣 武典	18	小平 健男	23	太田 健夫	26	三橋 直樹	29	重山 まこと	34	今泉 伸夫
10	望月 令子	14	鈴木 到久	18	丸山 アヤ子	23	土井 日出子	26	神田 友直	29	中村 恭子	34	漆畑 光一
10	三宅 喜代子	14	山崎 康友	18	今坂 依子	23	徳山 淑美	27	大矢 八郎	29	江口 矢代	34	斎藤 耕一
11	朝倉 啓行	14	永坂 孝次郎	18	根岸 弘子	23	安藤 木村	27	楠山 哲四郎	29	田中 美賢	34	廣瀬 雅子
11	篠田 新一	14	依三 品勝	18	江熱 田信	23	木村 崎裕	27	高橋 次郎	29	大浅 川英	34	大谷 平雅
11	嶋上 ミドリ	14	平野 愛子	18	大島 千津子	23	大塚 弘章	27	白井 良雄	29	松岡 英一	34	村居 洋子
11	石井 はる	14	大月 文江	18	保科 宏義	23	牧野 純一	27	佐々木 洋子	30	玉利 勝昭	35	関根 純一
11	角田 瑶子	14	城端 米子	18	山縣 武夫	23	秋間 道夫	27	辻三 智子	30	松本 安弘	35	杉村 隆夫
11	青井 文子	15	宍戸 健一郎	18	小田 原和子	23	佐橋 みち子	27	清水 悦子	30	浜野 巖	35	添田 恵美子
11	山崎 康子	15	佐山 實兼	18	尾花 珠樹	23	安井 幹雄	27	桑田 喜美子	30	館 幹三	35	市川 愛子
12	深谷 謙二	15	今井 兼介	18	伊藤 達雄	23	南澤 明子	27	沼本 俊雄	30	石井 修悟	35	須貝 道子
12	岩下 秀男	15	齊藤 健史	18	田村 浩子	24	吉村 治佳	27	豊田 融一	30	南雲 悟子	35	清水 光子
12	加藤 信朗	15	大矢 正雄	18	松風 はる美	24	星輝 佳彦	27	永野 勝一	30	依田 寿美	35	田村 英子
12	吉田 赴	15	平野 重夫	19	岩谷 豊彦	24	後藤 茂彰	27	大竹 英一	30	大村 芙美	35	萩原 百合枝
12	小松 二郎	15	磯正 格稔	19	安藤 猛稔	24	野地 勝枝	27	岡本 匡久	31	宮邊 真佐子	36	丹羽 雅子
12	小濃 部昭雄	15	高見 澤茂	19	堀内 稔夫	24	泰 菊枝	27	多 則久	31	重松 忠男	36	山城 玉香
12	岡 正雄	16	伊達 洋一	19	乾 兌子	24	島田 勝美	27	杉浦 保夫	31	藤村 純子	36	福井 節子
12	渡辺 一男	16	篠山 利生	20	河野 照秋	24	名児 耶忠	27	尾村 彰彦	31	野村 斉子	36	畑名 由美子
12	西脇 潤	16	永田 弘子	20	田島 照郎	25	三樹 勁志	27	香中 敬子	31	田中 清治	37	降旗 正明
12	佐川 由里子	17	大村 昭夫	20	橋本 文男	25	千々 波天	27	若王子 和子	32	中川 雅治	37	石山 恭市
13	岸 亨	17	下條 由之	20	鎌野 京子	25	岩崎 敏之	27	杉山 朝子	32	増田 桂子	38	中野 千代子
13	高見 沢裕	17	曾我 久三	20	岡田 昇昭	26	小見 山博	27	渡辺 翠子	32	小清水 和子	39	平野 みどり
13	澤原 昌	17	山本 彦三	20	上野 美沙也	26	竹内 延男	27	町田 恭子	32	神田 啓津子	39	奈良 弘子
13	高岡 生水夫	17	山田 彦久	20	中山 利夫	26	菅沼 浩清	27	植田 和治	32	小森 保久	44	小林 桂子
13	小糸 義男	17	岩谷 倫久	20	志鎌 利子	26	堀持 川市	27	足立 英修	32	宮田 維久	47	窪田 賢雄
13	吉田 一	17	山板 橋毅	21	志桑 原幸	26	堀島 正茂	27	佐藤 好恵	32	川島 澄江	48	永渡 和明
13	大井 成一	17	岡崎 正直	21	雲石 福子	26	鹿島 敬三	27	富安 好治	33	梶川 晋一	48	山縣 かずみ
13	村松 樹郎	17	中野 若知	21	鈴木 福子	26	武田 敬三	27	高橋 雄一	33	鈴木 春樹	49	金子 村口
13	三宅 雅彦	17	山野 知里	21	志賀 芙規子	26	益齋 藤初	27	高橋 秀子	33	沼本 清子	52	中水 健二
13	立原 嘉子	17	八木 美智子	21	志春 日フジ	26	谷森 定洋	27	海老 田玉	33	中村 谷良	55	宮田 健三
13	宮川 英子	17	多田 揚子	21	石崎 富み	26	森石 川泉	27	岩田 喜代	33	神谷 朗	57	中村 井嘉
13	藤平 千恵子	17	権 笹治	21	高橋 林高	26	小泉 形彦	27	寺嶋 敏子	33	飯田 春樹	57	瀬上 原謙
13	池田 悦子	18	瀬田 精一郎	22	小豊 田宏	26	平西 武彦	29	加藤 泰之	33	鈴木 純和	58	上川 平美
13	山本 恒子	18	小見 山保	22	西川 武彦	26	赤	29	高野	33	樋口	64	益井

編集後記

今号は寄稿を中心に編集しました。各年代の同窓生からの寄稿ばかりでなく、旧教諭伊東先生や、現役の大橋副校長先生からも寄稿を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

戦争体験、学童疎開体験、昔の地域での生活、昔の東大原での生活等、回を重ねるごとに増加している貴重な文章の蓄積は、振り返ってみると貴重な地域歴史の証言になるでしょう。

今年には総会では天文学者になったまだ若い筈伸浩さん(五八回生)が講演をしてくださいます。久しぶりに若返って天体の世界に遊びましょう。皆様のご参加を待ちしています。

同窓会への連絡、問い合わせ、寄稿の送付、送金の方法について

同窓会の事務所の所在地は、会則では「東大原小学校」となっております。しかし現状では、学校内で事務を行うことが学校管理上の理由で出来ません。会員各位にはこの点でご不便をお掛けします。

現在の事務局の住所は左記のとおりです。連絡は郵便かFAXでこちらにお願いいたします。

郵便番号一五五〇〇三二
世田谷区北沢二丁目三五の九
小清水ビル五階
東大原小学校同窓会事務局
FAX 〇三二五五四一五三五六

本同窓会は政治・宗教・思想について中立を守ります